徳島県脇町の町並調査

建造物研究室

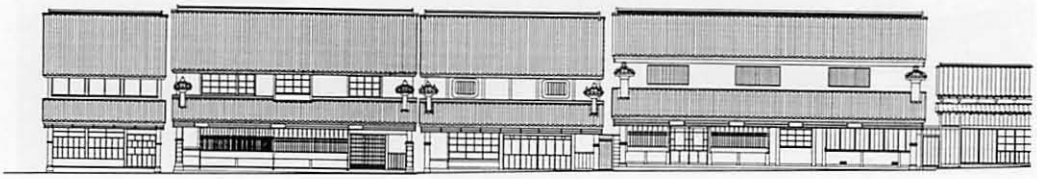
徳島県脇町は，徳島市の西約40kmの吉野川中流北岸に位置する人口約２万人の小都市である。撫養街道と讃岐街道の交点に位置し，中世後期に城下町として形成され，近世に入って城が破却された後は商都として発展した。特に江戸中期以降，阿波の特産である藍から配さんされる藍玉（蒅）の売買の中心地として栄えた。明治になって藍の流通が衰えると，繭糸の売買を行い県下第三の大都市として繁栄したが，その後鉄道の路線からはずれ，産業も沈滞し，かつての繁栄を物語る上質の町家群が遺されることになった。当研究室は脇町の依頼をうけ，国庫補助事業による伝統的建造物群保存対象調査を行った。

脇町の市街地は吉野川に接し，大谷川を挟んで西岸に町家の密集する旧脇町地区と，東岸に武家屋敷・農家の集る猪尻地区とからなる。調査はこの二つの地区の家屋の建築年代・建築構造・景観評価等を外観から悉皆調査し，その成果に基き町家の最も集中して遺存する旧脇町の南町地区のすべての町家及びその他の地区の主要な家屋の実測調査，社寺調査，資料調査を行うという，二段階方式をとった。これは数年来当研究室が行う町並調査で常に採用してきた方法である。

町並の特質　旧脇町の内の南町筋は町家が連擔し，猪尻地区では武家屋敷の敷地構成が遺りいづれも伝統的景観をよく残している。特に南町では約６割の町家が優れた景観を保持し，約８割が戦前以前の建築で占められている。南町以外にも伝統的町家が多いが，北町では道路拡幅ににより軒先が切断され，改造や建て替えも徐々に進行している。猪尻では建築年代はやや新しいが，土塀や生垣に囲まれた敷地内に広い庭をとって主屋と附属屋が立つ農村的な構成で，主屋には草葺屋根のものもある。

家屋の特質　旧脇町地区の町家は切妻造本瓦葺で通常平入であるが，時に妻入のものも混じる。壁や軒は漆喰塗込が多く，両端部分の庇下に袖壁，庇上に卯建を設ける例が多い。ただし卯建は明治以降に流行したらしく，古い町家には卯建はない。

図－１　調査地区と優れた景観の建物の分布（墨塗）（縮尺1/24000）

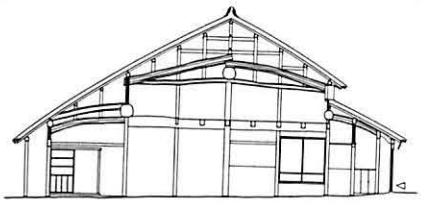


図－２　南町北側連続立面図

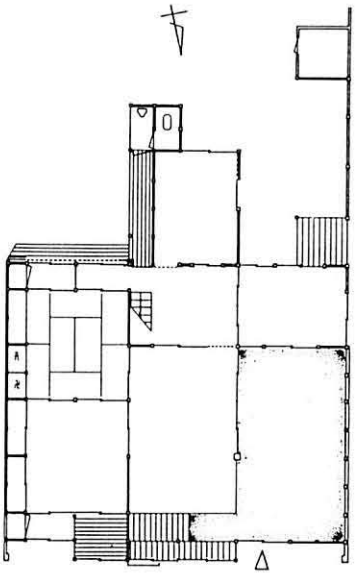
町家の主屋の背後には土蔵・離れ座敷を置く。土蔵のうちには藍の寝床として使われたものがあり脇町の産業の姿をよく残している。町家の建築年代は最も古いのが宝永八年の田村家で，全国的にみても貴重な遺構である。その他18世紀後期から戦前に至る各時代の町家が見出せる。平面は通常の町家の平面に近いが，表側をも土間とするもの（例．国見家），表屋造として表屋部分をすべて土間とするもの等，ミセノマ構成に特徴がある。架構は古くは登り梁を用いるが，特に古式な町家では登り梁が棟木を受けず別に束を組んでいる。19世紀中期になると登り梁を用いず，陸梁を二重にかける架構が多くなる。明治以降は洋小屋を用いるものもあらわれる。表構えは現状では格子・出格子が多いが，古くは蔀と大戸が主であった。柱に蔀の構えの痕跡を残すものが多く，明治頃は蔀と格子が併存したらしい。一方武家屋敷は農家と平面・構造共にかわらない。ただし時に式台をもつものがある。また下級武士の屋敷では小規模な町家の平面をもつ天保十八年建立の遺構がある。脇町の町家には棟札がよく遺っている。その内明治期の棟札にはハングル文字を模した日文を用いるものがあり，それらは当町の郷社八幡神社（本殿は18世紀初頭の三間社）の宮司の手で記されている。

脇町の町並保存　南町筋には18世紀前期以降の質の高い町家が集中して遺存するが，同時にその周辺にも優れた景観を形成する町家や武家屋敷が散在し，旧吉野川沿いには近世の水運と脇町の商家の結びつきを示す石垣，大谷川沿いには河畔の優れた自然景観がある。従って南町を伝統的建造物群保存地区として，脇町の都市環境整備の核とすると共に，周辺の市街地を緩やかな規制と誘導によって景観・環境の整備を行ってゆく必要がある。同時に町並保存と契機として，経済的な活性化を図り，総合的な社会開発事業として進めてゆく必要があろう。

以上の調査成果と保存計画の提案は『わきまち――伝統的建造物群保存対策調査報告書――』（昭和62年３月脇町刊）に詳述した。　（山岸常人）



図－３　田村家断面図



図－４　国見家平面図